

伯爵家に生まれた白洲正子(1910~1998)は、たぐいまれな感性と独自の視点によって日本文化を見直し、古人の想いや生活、日本古来の美の世界を現代によみがえらせた。「私たちの歴史は、たとえ無意識にせよ、私たちと共にある、私たちみんなの中に生きている、そう自覚することが、生きていることの意味」(「夕顔」)と述べる正子は、数多の作品や日々の暮らしの中でそれを体現しました。既成の概念にとらわれることなく、自分の目で見、感じ、それを己の言葉で表現した正子の魅力は、今なお多くの人々の共感を得、また憧れとなっています。

本展では、感性の源であり創作の原点であった「能」との係わりを起点に、多くの作品を紡ぎだし終の棲処となった鶴川での生活や、小林秀雄、青山二郎らとの交友を経て開花した作品世界を、愛用の品々や自筆原稿とともにご紹介します。白洲正子はいかにして「随筆家・白洲正子」になったのか―。その軌跡と魅力をご覧くださいと思います。

[関連イベント]

◆対談
「随筆家・白洲正子の素顔」 講師：牧山圭男(武相荘館長)、青柳恵介(国文学研究者) 会場：町田市民文学館 大会議室
 11月27日(土) 14:00~16:00
 ※電話による申込み(定員:100名) ※先着順 コールセンター/042-724-5656(10月21日13:00~)

◆朗読会
 ①「朗読」で味わう白洲正子の世界 朗読：NPO法人まちだ語り手の会 会場：町田市民文学館 大会議室
 11月12日(金) 10:30~11:30
 ②ことばで奏でる「かくれ里」 朗読：土井かつ恵 / ハープ：赤崎敬子 会場：町田市民文学館 大会議室
 12月4日(土) 14:00~15:00
 ※①②とも申込み不要(直接会場にお越しください)

◆講座
「自筆原稿で読む白洲正子」 講師：当館学芸員 会場：町田市民文学館 第6会議室
 12月16日(木) 14:00~15:30
 ※往復はがきによる申込み(定員:20名)
 氏名・住所・電話番号を明記し「白洲正子講座係」まで。1人1枚。
 ※応募〆切(必着)11月26日(金) (応募者多数の場合は抽選)

◆文学散歩
 ①正子が歩いた三輪 案内：当館学芸員 集合場所：小田急線・鶴川駅(現地解散)
 11月18日(木) 13:00~16:00
 ※希望者には午前中に武相荘をご案内します。
 ②正子が歩いた「東京の坂道」 案内：当館学芸員 集合場所：有楽町線・永田町駅(現地解散)
 12月10日(金) 13:00~16:00
 ※①②いずれも、往復はがきによる申込み(定員:各20名)
 氏名・住所・電話番号を明記し「文学散歩係」まで。1人1枚。
 ※施設観覧料等の実費は各自負担。①②とも3キロ程度歩きます。参加者には追って詳細を連絡します。
 ※応募〆切(必着)①11月5日(金) ②11月26日(金) (応募者多数の場合は抽選)

◆学芸員・市民研究員によるギャラリー・トーク
 11月13日(土)、16日(火)、30日(火)、12月11日(土)、14日(火) いずれも14:00~15:00
 ※申込み不要(観覧券を購入の上、展示室入口にお集まりください)



町田市民文学館ことばらんど

〒194-0013 東京都町田市原町田4-16-17
 Tel: 042-739-3420 Fax: 042-739-3421
 アクセス：JR横浜線「町田駅」ターミナル口より徒歩8分
 小田急線「町田駅」東口より徒歩12分

生誕100年

随筆家・白洲正子
 あざやかなる生の軌跡展

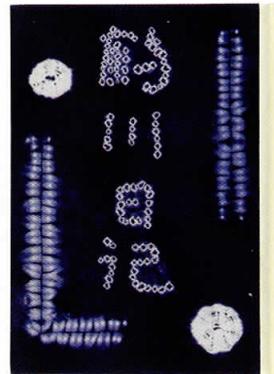


鶴川・自宅の竹林にて



梅若流謡本と舞扇

4歳の頃に初めて能を見て以来そのとりこになり、6歳で梅若六郎に入門。愛用の扇は、14歳でアメリカに留学した際にも携えていたという。



「鶴川日記」家蔵本

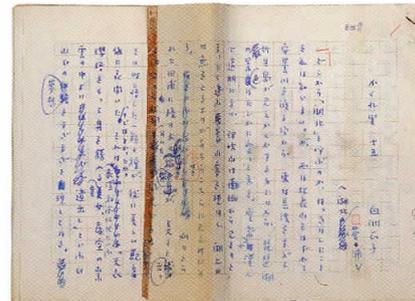
「鶴川日記」は、1978年7月から2ヶ月にわたり読売新聞に「自伝抄 鶴川日記」として連載され、1979年12月に文化出版局より刊行。転居した頃の鶴川村での生活を描く。



撮影・野中昭夫 写真提供・新潮社

能装束風の着物

1975年のイヴ・サンローラン来日歓迎パーティで着用。制作は、代々宮廷装束を手がけてきた高田家の24代目・俊男が担当。



原稿「かくれ里 十五」

「芸術新潮」1970年3月号に掲載された「かくれ里」の第15回「湖北 菅浦」。「かくれ里」は、1969年1月から2年にわたり連載され、のち1971年12月に新潮社から刊行された。翌年には第24回読売文学賞(随筆・紀行部門)を受賞。



織部菊花文角皿 江戸時代初期

「花びらの線が実に屈託なく、自由に筆を走らせている」のが美しいと評し、愛用した。

撮影・伊藤千晴